

## 2006年1月の大気大循環と世界の天候

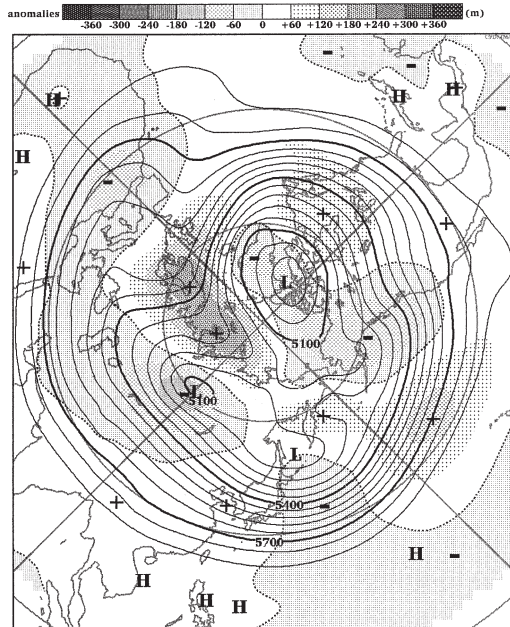
### 大気大循環

北半球500 hPa 高度では、極渦の中心は、グリーンランドからバフィン湾付近にかけてと、シベリア付近の2か所に見られ、スカンジナビア半島からノバヤゼムリャ島にかけてはリッジとなった。地中海から中央アジアにかけての中緯帯では負偏差に覆われたが、中国から西日本にかけては正偏差となった。北米ではラブラドル半島付近を中心に東部で正偏差となったが、西部ではアラスカ付近を中心に負偏差だった。

熱帯の対流活動では、インドネシア付近を中心に広い範囲で平年より活発だった。一方、太平洋赤道域の160°E 以東では、日付変更線付近を中心に不活発だった。これらの傾向は2005年11月以降持続している。インド洋西部では北半球側の西部と南半球側で平年より不活発だった。また北半球では、南アメリカ北部から大西洋熱帯域にかけて平年より活発、南半球では、オーストラリアの北西部と SPCZ (南太平洋収束帯) で平年より活発だった。

850 hPa 流線関数および風ベクトルでは、太平洋西部から中部にかけては南北両半球に明瞭な高気圧性循環偏差が見られた。このため太平洋西部と中部の赤道域では、明瞭な東風偏差となった。

SOI (南方振動指数) は+1.2となった。



2006年1月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差  
等値線間隔は60 m, 偏差パターン間隔は60 m, 平年値は1979~1993年のECMWF15年再解析データによる。

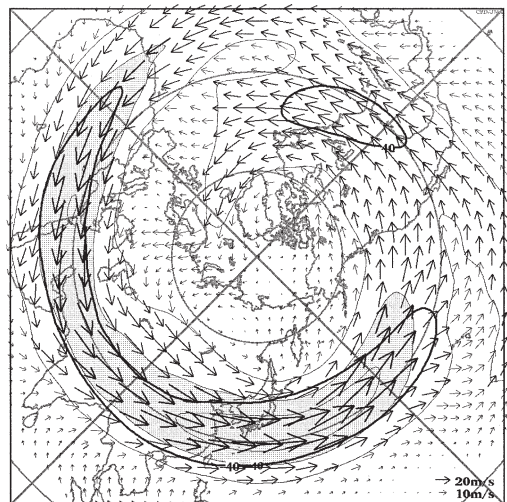
### 世界の天候

- ① ベーリング海周辺の少雨
- ② 中央シベリアから西シベリアの少雨
- ③ 西シベリアから中央アジアの低温

インド、ネパール、パキスタンなどで上旬に寒波に見舞われ、あわせて200人以上が死亡したと伝えられた。また、ロシア西部からヨーロッパ東部にかけても、中旬から下旬に寒波により800人以上の死者が出たと伝えられた。

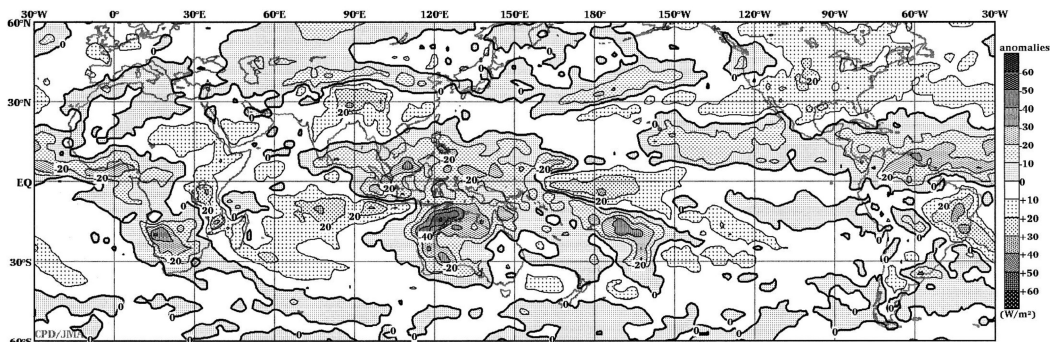
- ④ 中国北部からトルコ東部の多雨
- ⑤ 中国南部の高温
- ⑥ スバルバル諸島からグリーンランドの高温
- ⑦ ヨーロッパ南西部からアフリカ北西部の多雨
- ⑧ 北米の高温
- ⑨ 南米北部の多雨
- ⑩ オーストラリア北部から西部の多雨
- ⑪ オーストラリア中部から南東部の高温
- ⑫ オーストラリア西部の低温

(気象庁地球環境・海洋部気候情報課 久保池大輔)

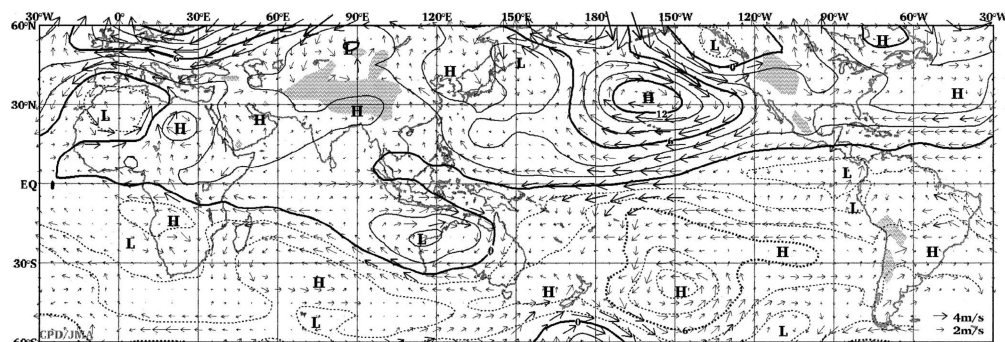


2006年1月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル

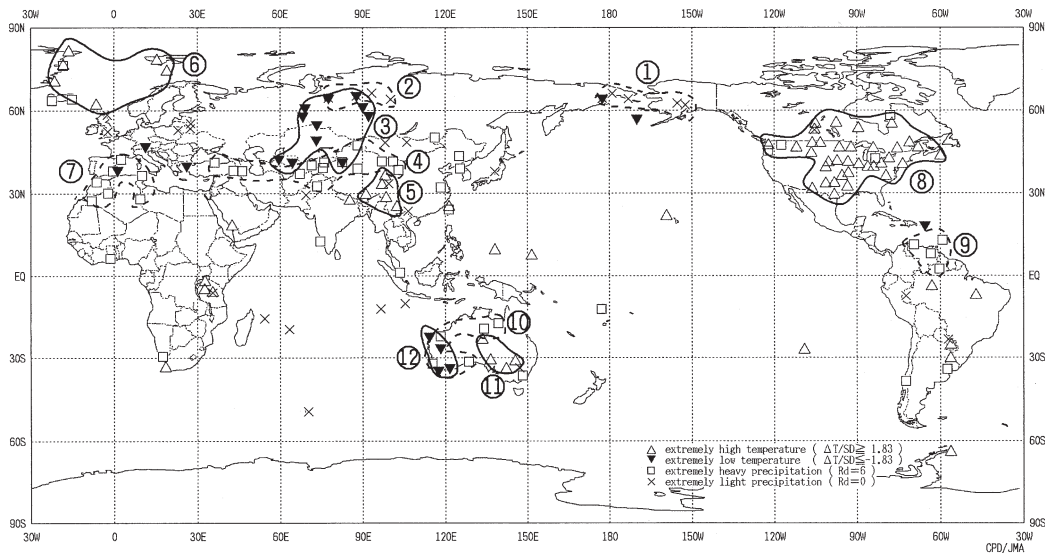
等値線間隔は20 m/s, 陰影部は40 m/s以上, 太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1979~1993年のECMWF15年再解析データによる。



2006年1月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は  $10 \text{ W/m}^2$  で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはCPC/NCEP/NOAA、平年値は1979~2000年のデータから作成。



2006年1月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。平年値は1979~1993年のECMWF15年再解析データによる。



2006年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上，異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0，図中の番号は本文中の番号と対応している。